

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

次第に変容する東アジア聖公会

—2012年度 CCEA 主教会に出席して

主教 アンデレ 中村 豊

今年の主教会は、10月3日(水)より8日(月)まで、「さあ、立て。ここから出かけよう。(ヨハネ14:31)」をテーマに、ミャンマー聖公会を除く東アジアの全ての管区・教区より主教が参加し、台北南東に位置する宜蘭(イーラン)市で開催されました。

活かされた信仰

主教たちは、「活ける水(ヨハネ福音書7章38節) ホテル・Living Water Hotel」という場所に宿泊しました。ホテルのオーナーは、3年前アメリカから帰国した、台湾聖公会の女性信徒です。アメリカでは手広く商売を営んでおりましたが、リーマンショックで財産全てを失い、失意の内に帰国しました。その時、「この地にキリスト者に相応しいホテルを建てなさい。」との神の声が聞こえてきたそうです。無一文からの出発でしたが、この地域の教会の援助を得ながら、銀行からの融資を獲得し、とうとう18か月前に、9階建のホテルが完成しました。

温泉が完備されている豪華な部屋が各階に4つ用意されており、ホテルに隣接したビルの2階が礼拝堂です。当初、主日礼拝出席者は僅かに2名でしたが、現在は100名以上の人たちが礼拝に参加しております。これも神の奇跡であるとオーナーは話しておりました。

儒教とキリスト教

今回の主教会では、講師としてイエズス会神父マーク・ファング(房志榮) 司祭を招聘していましたが、体調不良で出席不可能となり、同神父のレジメを基にして、フィリピン、オーストラリアそしてマレーシアの3主教が講評し、質疑応答をおこないました。

レジメで興味を引いたのは、東アジアと儒教の関連です。

季路(きろ)が死者の魂に対してどうやって仕えたら良いか尋ねました。孔子は、「まだ人に仕える事さえ十分に出来ないのに、どうして上手く死者の魂に仕える事ができようか(未能事人・

□会議・プログラム等予定

(10月25日以降および
前回報告以降追加分)

10月

- 1日(月) 宣教協議会提言作成委員会
- 9日(火) 宣教協議会実行委員会
- 19日(金) 東日本地区日本聖公会資料保管に関する協議会〔立教女学院〕
- 20日(土) 正義と平和・ジェンダープロジェクト〔京都教区センター〕
- 26日(金) 西日本地区日本聖公会資料保管に関する協議会〔神戸松蔭女子学院大学〕
- 29日(月) 収益事業委員会
- 30日(火) 「いっしょに歩こう!プロジェクト」運営委員会〔仙台〕
- 31日(水) 第2回世界聖公会平和協議会実行委員会
- 31日(水) 青年委員会

11月

- 7日(水) 財政主査会
- 8日(木) 各教区広報担当責任者会
- 9日(金) 憲法法規委員会
- 9日(金) 主事会議
- 13日(火) 女性デスク会議
- 16日(金) 原発事故と放射能に関するワーキング・グループ〔福島聖ステパノ教会〕
- 20日(火) 59-3 常議員会
- 24日(土) 正義と平和・憲法プロジェクト(中部教区センター)
- 29日(木) 教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員会
- 30日(金) 臨時主教会〔福岡〕

12月

- 1日(土) 九州教区主教按手式
- 4日(火) 礼拝委員会
- 6日(木) 文書保管委員会
- 7日(金) ウィリアムズ主教記念基金運営委員会(立教)
- 11日(火) ~ 13日(木) 正義と平和・日韓協働プロジェクト合同会議(ソウル)
- 13日(木) 年金委員会/年金維持資金管理委員会合同委員会
- 20日(木) 正義と平和委員会(京都教区センター)

(次頁へ続く)

焉能事鬼。』と答えました。そこで季路は死について尋ねました。孔子は、「まだ生について十分に理解していないのに、どうして死を理解できるだろうか。(未知生・焉知死)」と答えました。

私たち日本人にもなじみの深い孔子の言葉ですが、孔子の場合、死を真正面からとらえておりません。しかし、イエスの場合、十字架の苦しみと死をとおして、その死を克服した、神の国に至る道を私たちに示しているのです。ここに、東アジア各国の、現代における宣教のビジョンについてキリスト者が語る言葉を持っている、とマーク神父は主張しておりました。

東アジアの青年問題

主教同士の話し合いでは、ミャンマー聖公会大主教から要請があった、補佐主教6名の主教会参加要請に端を発した、CCEA主教会の目的、10年、20年先を見据えたあり方などを論議しました。

財政的に困難な状況下にあるミャンマー聖公会の場合、会議参加主教の全費用を協議会が負担しなければならなくなり、基金運用が困難となることが明らです。協議の結果、ミャンマー聖公会より大主教他1名、日本聖公会より首座主教他1名の参加を要請することになり

(前頁より)

<関係諸団体会議等>

10月26日(金)～11月7日(水) ACC-15 [ニュージーランド・オークランド] - 三鍋主教出席
12月4日(火)～7日(金) 原子力に関する宗教者国際会議(会津・郡山) - 岩城聰司祭出席
14日(金) 日キ連常任委員会



花蓮聖ルカ教会を訪ねて

ました。

東アジア聖公会の将来は、青年抜きには考えられません。日本は、韓国との間に竹島問題を、中国・台湾とは尖閣諸島の領土問題を抱えております。中国や韓国は、学校において、両島



は自国のものであることを教育されていると聞きます。一方、日本の場合、高校では、近代史にたどり着く前に、卒業のときを迎えます。東アジアの相互理解と平和を願うとき、将来を担うキリスト者の、より一層の交流が求められるのは当然のことです。

主教会でも、青年交流の必要性を痛感し、来年の9月末、神戸で東アジア8管区の青年担当者が集い、「青年フォーラム」を開催することが

決定されました。このフォーラムは、2017年に開催されることが決定されている「東アジア聖公会青年会議」向けの準備となります。

なお、フィリピン聖公会ミンダナオ教区が2つに分割され、ダバオ教区が誕生することになり、初代主教にジョナサン・カシミナ司祭が選ばれ、11月23日に主教按手式が挙行されます。

東アジア聖公会にまた一つ、教区が与えられたことを共に慶びました。

隠れキリシタン

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤 牧人

9月の宣教協議会は有意義に終えることができたのだと思います。そしてその報告は各教区でそれぞれになされていることと思います。またその評価もさまざまにあらうかと思えます。出された「提言」をそれぞれの場で活かし、教区・教会の宣教の充実へと進めていってほしいと思えます。

私もこの協議会に参加し、目が釘付けになったところがありました。それは基調講演の中で、聖公会が大切にしてきた「教会の5要素」と言われる、ケリグマ（み言葉を宣べ伝えること）、デアコニア（この世界、社会の必要に応じ奉仕すること）、マルトゥリア（この世界、社会に対して、福音を具体的に証しすること）、レイトウルギア（祈り、礼拝すること）、コイノニア（交わり、共同体）という箇所で、その中のマルトゥリアの説明です。その語源は「殉教」ですが、「存在そのもので、福音を証しすることが含まれる」とのことです。

私たち信徒一人ひとりの存在そのものが、福音を証しする、と言うのです。なんだか目が開かれませんか。そして、単に開かれるというのではなく、前向きに、希望の光が注ぐように、自分の存在価値の再確認へと導かれていくのではないのでしょうか。

私の持論に、「教会の建物も宣教する」という思いがあります。もちろんそれはただ建っていれば良いというものではありませんが、そこにキリストの教会が存在しているという事実は、地域に訴えるものが、語るものがあると思うのです。

そこで思ったのです。「隠れキリシタン」と言う言葉がありますが、これを間違っって使っている人が多いのではないかということです。自分の教会生活の仕方の後ろめたさからなのでしょうか、自分は隠れキリシタンなんだ、と言う方がいます。あまり教会に来ない、離れているということなのでしょう。

隠れキリシタンとは、江戸時代に江戸幕府による禁教令の後、強制改宗により仏教を信仰していると見せかけてキリスト教を偽装棄教したキリスト信者のことなのです。この他にも、禁教令が解かれ、隠れる必要がなくなっても、戻らない信仰者の群れのことを指すこともあります。いずれにしろ、彼らは、禁教令によって地下に潜伏し、250年もの間、神父がいなくなっても信仰を継承していたのです。そのエネルギーはどこから来るのでしょうか。洗礼は受けたが教会から離れ、信仰生活、教会生活に距離を置くことが「隠れキリシタン」ではないのです。

私より少し先輩のある司祭さん（この方はお祈

りが長いと有名な方です)が、一人でラーメン屋に入り、ラーメンが出てきたので食前の感謝をしました。うつむき祈っていると、そこの主人がカウンターの中から心配そうに声をかけてきたそうです。「お客さん、ご気分でも悪いのですか?」と。うつむいて長く祈っていたのでそう思われたらしいのです。笑い話の一つですが、しかし、これも存在が宣教の働きをしているということにつながるのではないかと思うのです。

私たちキリスト者は隠れてはなりません。存在そのもので福音を証しすることが出来る。私たちの存在そのものが宣教の働きとなりうるということを確認していきたいものです。

基調講演では「教会の5つの要素」が互いに結び合っひとつとなっていくことによって教会を構成し、宣教の働きへと向かうのだと語られたと理解しました。そのためにも私たちは隠れるのではなく、その存在を示し続けていくことの大切さを思うのです。私たち一人一人の生きざまを、「灯を燭台の上に置く」(マタイ5:15)ように、その姿を示していくことが、み言葉が広がる第一歩となるのではないのでしょうか。

マルトウリア(martyria)、心に刻み、覚えておきたい言葉となりました。



□各教区

北海道

- ・第71(定期)教区会 2012年11月22日(木) 17時半～23日(金)16時 日本聖公会北海道教区主教座聖堂(札幌キリスト教会)

東北

- ・第93(定期)教区会 2012年11月23日(金) 13時～24日(土)12時半 仙台基督教会仮礼拝所・パセオビル研修室

北関東

- ・第79(定期)教区会 2012年11月23日(金)10時半～17時 志木聖母教会

東京

- ・第119(定期)教区会 2012年11月23日(金)9時～17時 聖アンデレ主教座聖堂・聖アンデレホール

横浜

- ・第72(定期)教区会 2012年11月22日(木) 18時～23日(金)16時 横浜聖アンデレ主教座聖堂

中部

- ・第84(定期)教区会 2012年11月23日(金) 9時～16時 主教座聖堂名古屋聖マタイ教

会

京都

- ・第107(定期)教区会 2012年11月23日(金)9時～17時 京都教区主教座聖堂・京都教区教区センター

大阪

- ・第108(定期)教区会 2012年11月23日(金)9時～17時 日本聖公会大阪教区主教座聖堂 会館(川口基督教会)
- ・聖職按手式 2012年12月8日(土)10時半 大阪教区主教座聖堂(川口基督教会)
- 司祭按手:志願者 執事ジョージ林正樹

神戸

- ・第80(定期)教区会 2011年11月23日(金) 8時～17時 神戸聖ミカエル大聖堂(神戸教区主教座聖堂)

九州

- ・第106(定期)教区会 2012年11月22日(木)17時～23日(金)15時 日本聖公会九州教区主教座聖堂および教区センター



† 逝去者 靈魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 ヨハネ松本 ^{かのう}文 (横浜教区・退職)

2012年9月21日(金) 逝去(93歳)

司祭 ヨシユア早川義也 (九州教区・退職)

2012年10月2日(火) 逝去(75歳)

主教 ヨセフ飯田徳昭 (九州教区・退職)

2012年10月10日(水) 逝去(83歳)

📖 出版物案内

・『2013年度 教会暦・日課表』

2012年10月15日付発行 価280円(税込)

《人 事》

東京

司祭 テモテ小笠原 忍

2012年8月31日付 東京教区事務所顧問解任

司祭 ペテロ井口 諭

2012年9月11日付 釜石ベースへの出張命令

横浜

司祭 ルカ武藤謙一

2012年12月1日付 沼津聖ヨハネ教会牧師の任を解く。

同日付 日本聖公会九州教区への転籍とする。

司祭 ペテロ松田 浩

2012年11月30日付 柏聖アンデレ教会牧師の任を解く。

2012年12月1日付 沼津聖ヨハネ教会牧師に任命する。

司祭 ジェローム村上守旦

2012年11月30日付 浦安伝道所協働の任を解く。

2012年12月1日付 柏聖アンデレ教会管理牧師に任命する。

中部

聖職候補生 フランシス江夏一彰 2012年9月22日 執事に按手される

執事 フランシス江夏一彰 2012年9月22日付 軽井沢ショー記念礼拝堂勤務を命じる。

京都

司祭 ヨブ加納嘉人

2012年9月30日付 新宮聖公会牧師の任を解く。願いによって休職を許可する。

司祭 パウロ北山和民

2012年10月1日付 新宮聖公会の管理を委嘱する。

神戸

聖職候補生 ポール・マイケル・トルハースト

2012年9月22日 執事に按手される

執事 ポール・マイケル・トルハースト

2012年9月26日付 ミッションズ・トゥ・シーフェアラーズ神戸への出向及び聖ミカエル国際学校にチャプレンとして派遣を命じる。

沖縄

司祭 イザヤ金 ^{ジョンズ} 軒洸

2012年11月11日付 島袋諸聖徒教会主日勤務の任を解く。

2012年11月12日付 三原聖ペテロ聖パウロ教会勤務を命ずる。

《教会・施設等》

京都復活教会

FAX 番号変更 (新) 075-451-2187

2012年人権セミナー

テーマ：北海道の歴史を通して学ぶ ―人権の視点から―

2012年人権セミナー報告

管区人権担当者 打田茉莉

北海道の歴史を通して学ぶ―人権の視点から―というテーマで10月10日から12日まで、札幌キリスト教会を主会場として今年の日本聖公会人権セミナーが開催されました。全体の参加者は、スタッフも含め39名でした。

初日の基調講演は、「札幌郷土を掘る会」代表小松豊さんで、「民衆の苦難の歴史や人権無視の歴史は支配者の作成する歴史記録にあまり取り上げられない。タコ部屋労働は皆無である。」という説明に始まり、強制労働（アイヌ、囚人、タコ部屋、中国・朝鮮人強制連行）などに関する聞き取り調査、フィールドワーク、民衆史講座の開催や出版など民衆の視点から札幌（北海道）の歴史を掘り起こしている体験からのお話でした。小松さんは、1947年生まれで戦争を知らない世代ですが、中国の農村を襲撃して虐殺・略奪・放火などを行った体験を証言し、そのような体験を心から悔いて証言する先輩に感動し、「語り部二世」を目指すようになり、次世代に語り継いでいる方です。平和と人権、民主主義において、現在と未来のために過去を掘り起こさなければならない、現在も厳しい労働・生活状態に置かれている人々の人権の実態や社会的弱者の実態が日常的に見えにくくされ、「現在」も掘り起こさなければならない課題が出てきていると訴えていらっしゃいます。

小松さんのお話で北海道開拓史について忙しく思い巡らしたまま、閉館時刻の迫る北海道立アイヌ総合センターの資料展示室に行きました。ここは、「文化」中心の展示と説明でした。

夕食後の第2セッションは、大町信也司祭による聖書の時間でした。あなたの心にそっと触

れさせてくださいという意味の「イランカラブテ」(i ran karap te) がアイヌ語での「こんにちは」にあたるという。このような美しい挨拶を交わす人たちに私たちはどのように関わってきたのか？と課題が出されました。①すでに名付けられた世界と人々への敬意を回復する事（創世記2章15～19）、②「負わされた不当な名」の呪縛を解いて新しい世界へと招く神（マルコ5章1～20）、③「名前」を担って歩かれる神（マタイ1章18～21、ルカ1章26～34）をもとに学びました。

2日目は、貸切バスで「有珠聖公会」に行き、大友正幸司祭から「北海道とキリスト教」について、なかでも北海道キリスト教宣教の特徴の一つである聖公会を中心としたアイヌ伝道、バチラーの働き、バチラーを支えた人々について詳しくうかがいました。バチラーはアイヌ民族救済のため、国や北海道にもその福祉政策を重要課題として取り上げるように訴え続けたということです。

昼食後、登別に移動し、「知里幸恵 銀のしずく記念館」を訪れ、幸恵の兄の娘さんであり館長である横山むつみ氏から1時間ほどお話をうかがった後、幸恵の遺品、手紙、手帳、ノートや写真などの展示を見ました。わずか19歳で生涯を閉じた彼女は、学校ではアイヌと差別を受けながらもアイヌ語の表記を工夫し、アイヌの物語を文字化したうえ日本語に訳したのです。

次に白老へと急ぎ、アイヌ民族博物館で伝統舞踊や楽器演奏を鑑賞し、伝統工芸などの展示を見ました。ここも「文化」中心でしたが、ミュージアムショップに、私たちが読みたい知里幸恵の「アイヌ神謡集」や萱野茂著「アイヌの碑」はじめ東京の書店には置いてない本がいろいろありました。

札幌へ戻るバスの中で夕食をとる忙しさでし

たが、19時からの札幌キリスト教会における「人権を考え祈る集い」には、大勢集まりました。①高次脳機能障害に悩む人やその家族の会コロボックルの中野匡子さん、②障害者自立支援事業所アリスの上村裕子さん、③憲法を読む会の小貫雅夫司祭、④ハンセン病患者支援の好善社の山崎典美さん、⑤南相馬被災地支援の表瑞木さん、⑥網走の里親活動ファミリーホームの飯野司祭から活動状況を聞いて祈りました。

最終日は、振り返りと分かち合いにたっぷり時間をとりました。参加者の村崎恭子さん(横浜聖アンデレ教会信徒)はアイヌ語の伝承に努力されています。

明治以降の同化政策によって民族文化が否定され、アイヌ語の禁止と日本語の強制、伝統的狩猟法の禁止、創氏改名が行われ、「北海道旧土人保護法」が廃止されたのは1997年です。この年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が制定されましたが、これには、アイヌ民族への謝罪も権利の保障もありません。2007年、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」採択を受けて衆参両議院は「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」、内閣の「アイヌ政策推進会議」が始まったのです。

北海道で暮らしにくくなっている若い人たちがどんどん関東地方に移住している現実があることを横山明光司祭から聞きました。

■ 2012年人権セミナーに参加して

横浜聖アンデレ教会 ヨセフ中原禮人

『太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて野辺に山辺に嬉々として暮らしてゐた多くの民の行方も又何処。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにただ驚きの眼をみはるばかり。而も其の眼からは一挙一動宗教的観念に支配されてゐた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行く手も見わかず、よそご慈悲にすがらねばならぬ、浅ましい姿、おお亡びゆくもの…それは今の私

たちの名、何といふ悲しい名前を私たちは持っているのせう。』

この文章は、アイヌに生まれアイヌ語の中で生き、19歳で亡くなった、知里幸恵さんの書かれた「アイヌ神謡集」の序の一部です。(岩波文庫・現在第50刷・540円)

彼女は、金田一京助に支えられて学び、この本の校正終了後に死亡したとの事。現在彼女の生誕地、登別に「銀のしずく記念館」が建てられ、彼女の遺品が展示されていて、引き継がれた語り部から彼女の生き様のお話を聞くことが出来ました。

以前からアイヌに関して現地を訪問したいと思っていましたが、取っ掛かりが掴めず今回初めて札幌キリスト教会を拠点とした「日本聖公会人権セミナー」が開かれると聞き、急遽参加してきました。

「札幌郷土を掘る会」の代表者の基調講演に始まり、アイヌの資料や生活道具等の展示場、アイヌ民俗博物館などを見学に行き、アイヌ伝道では抜きにしては考えられない、ジョン・バチラー師が有珠に建てられた、石造りの「有珠聖公会・バチラー夫妻記念館」を訪問しそこでの礼拝、札幌の教会での聖餐式、人権に関する講話や話し合い、分かち合い等と、多くの仲間と知り合うことが出来中身のとても濃い三日間のセミナーでした。

アイヌに関する話を現場を見て具体的にお聞きするのは初めてでしたが、実際には強制連行されてきた朝鮮半島の人々や囚人達、北の地で差別された人達によって北海道の地域開拓が進められ近代化されて来ました。農業で林業で漁業で畜産業で土木で、非常に危険で汚い仕事を差別の中で請け負わされて彼らは必死に生きてきたのです。そして今回ここで学んだ事、今も続いている日本各地の差別も含めて自ら正しく学び、自分の仲間たちに、また次世代の人達に絶えることなく正しく伝えて行かなければならないと改めて思いました。こういうセミナーの参加者の責任は重いなあと考えながら帰ってきました。

■ 2012年人権セミナーに参加して

名古屋聖マタイ教会 吉川千恵子
各地にある人権問題を学ぶという趣旨で、北海道で行われた人権セミナーに参加いたしました。

北海道開拓のために、苦しんできた人々がいる事。そこには「タコ部屋」と呼ばれるところで働かされた人々、朝鮮、中国からの強制労働者、流刑のため北海道に送られた人々、そして先住民族であるアイヌの人々がいました。そして自然と共調してきた先住民族にとっては開拓ではなく破壊でしかなかったのではないかと思います。アイヌの人々は後から来た和人と呼ばれる人々によって、今までの住まいを追われ住むのに適さない土地に追いやられたのです。そしてその虐げられた人々の力によって現在便利に利用している道路も貯水池も水路も造られてきたのです。

キリスト教はその地に伝道のためかかわりを持ちました。今回アイヌ民族への伝道を行ったジョン・バチラーの働きを学びました。教育・医療・伝道・そしてアイヌを世界にしらしめるため著書の出版をしました。それを一人の力ではなく多くの人の協力によって成し遂げたと聞きました。またアイヌの才能ある女性、知里幸恵の話

(アイヌ神謡集を編訳) を聞く事もできました。

これらの後で「北海道教区人権を考え祈る集い」というプログラムがあり、6人の方々がかわっているプログラムについて話を聞く機会が与えられました。「脳外傷友の会 コロボックル」「障がい者自立支援事業 アリス」「憲法を読む会」「好善社(ハンセン病への理解を進める)」「南相馬での活動」「ファミリーホーム(里親)」一人一人が自分のかかわっている働きについて淡々とまた、熱意を込めて話されるのをうかがって一人にできることは大きくはないけれど、それの一つ一つが大切なことであり、すべてをすることはできないけれど、今置かれている場所で出来る事をしていくことの大切さを教えられました。

これら小さくされた人々と如何にかかわっていくか。まず知ることが一番先でしょうか。虐げられた人々がいるという歴史を知ることによってこれからどのようにしていったらいいのか。現在も同じことが繰り返されているのではないかと考えていけると思います。世界にも日本にもそして自分の周りにもこれらの問題があるのではないのでしょうか。単に気が付かないだけで。小さくされた人々と一緒に歩いていくことができますように。

東日本大震災支援

「いっしょに歩こう!プロジェクト」 仙台オフィスから ㊦

— 「福島ベース」ご報告 —

司祭 影山博美

6月に運営委員会で設置が認められましたが、なかなか動きが取れない状態です。こういう現状の中で為されてきたこと・今計画中のことを書かせて頂きます。

福島には東電福島第一原発事故で住まいを離れて避難している多くの方々が仮設住宅や借

り上げ住宅等で生活していらっしゃいます。と同時に、福島を離れて避難生活をされている方々も多くいらっしゃいます。福島市には20の私立幼稚園がありますが、原発事故後、その20の幼稚園から約500人の園児が避難等で減少致しました。私たちが関わっている「みその幼稚園」もその例に漏れません。放射能汚染の他に園児減少と言う重い課題も担わなければならなくなりました。保育活動、園舎・園庭の除染、補償の問題等教職員はじめ保護者も大変な日々を送ってきました。そのような努力によって園内外の放射線量は心配ない程度(100%安全と言うことにはないですが)になりましたが、園庭の大型遊具には放射能がしみこみ、空間線量が回りの園

庭より高い状態でした。そこで、園児たちが元気に楽しく外で遊べるよう、大型遊具新規購入と砂場建屋設置の補助を東北教区と致しました。特に砂場に建屋を設置したことが地元紙に取り上げられ紹介されていました。今、園児たちはこれらの遊具で楽しく遊んでいます。

福島聖ステパノ教会近くに、15世帯29人が生活されている仮設住宅がありま



す。比較的高齢の方々が避難生活をされています。その仮設住宅への関わりをベースとして挙げっていますが、今、福島聖ステパノ教会信徒・八代正敦兄がやっておられる「枇杷葉温圧」でリラックスして頂こう、と計画しているところです。お求めがあるならば、お茶点やマッサージなども考えております。その節は皆様のお力、お技を拝借致したいと思います。

内閣総理大臣 野田佳彦殿
防衛大臣 森本 敏殿

わたしたちは、沖縄「普天間基地」に米軍新型輸送機オスプレイが配備されることに反対し、世界で一番危険な基地「普天間基地」の早期閉鎖と返還を要望します。

また新しい米軍基地を建設することに反対し、いのちと平和のためにこそ力を合わせることを、日本の、またわたしたちの使命であると信じます。

「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」

マタイによる福音書 26 章 52 節

わたしたちは日本聖公会に連なる者として、イエス・キリストの教えに従い、一人ひとりのいのちが尊ばれる社会の実現のために、心を合わせて祈り活動してきました。ことに、これまで沖縄の視点から平和の学びを進めつつ、沖縄の米軍基地をめぐる現状に多大な関心を寄せてきました。

この度、日本政府は米国政府・米軍の意向を受け、日米の外務、防衛当局で構成する日米合同委員会において飛行ルールについて大筋で合意し、オスプレイの日本国内での飛行を認める「安全宣言」を出す方針を固めました。それを受けて米軍はオスプレイを一時駐機中の岩国基地において、試験飛行を強行しました。オスプレイは、間もなく岩国基地から普天間飛行場に移され、10月中に低空飛行訓練を開始されることとなります。

「最初から結論ありき」としか思えないこの判断、また国民の声に聴かずいのちを大切にしない日本政府の対応に怒りを禁じえません。

去る9月9日、沖縄では10万人以上が集まりオスプレイ配備反対の県民大会が開催され、明確に受け入れ拒否を表明しています。

遑って8月米国政府は、ハワイにおけるオスプレイの飛行訓練について現地住民の声を聴き、環境

へ配慮し、訓練を中止しました。片や中止されたものがなぜ、沖縄・日本においては安全とされ実施されようとしているのか、私たちには到底理解できません。

さらに配備が計画されている普天間基地は宜野湾市の真ん中にあり、住宅だけではなく病院・保育所など人が集まる施設が多数あり、「世界一危険な基地」と指摘され続けています。米軍と米軍基地の存在がこれまで沖縄の人々に強いてきた圧迫と危険をさらに増大させるこの方針は、日本が選択してはならない大きな誤りであるとわたしたちは考えます。

今わたしたちには、国際社会とくに東北アジアの地域において平和のために努力することこそが緊急に求められています。わたしたちは、沖縄の〈命こそ宝〉という心を大切に思うものとして、今、以下のことを要望いたします。

オスプレイの普天間基地その他基地への配備を取りやめ、飛行訓練許可を破棄すること。

世界一危険な普天間基地の早期返還を実現し、また移設の方針を撤回すること。名護市周辺の住民の間に不安と分裂をもたらすこれらの計画を速やかに中止すること。

沖縄における軍事基地のための予算を、平和をつくり出すために用いる予算に転換すること。

2012年9月24日

日本聖公会正義と平和委員会
委員長 主教 ペテロ 渋澤一郎

内閣総理大臣 野田 佳彦様
外務大臣 玄葉光一郎様
防衛大臣 森本 敏様

米国大統領 バラク・フセイン・オバマ Jr. 様
駐日米国大使 ジョン・ルース様
在日米軍司令官 ダン・クロイド様

止むことなく繰り返される米兵による性的暴力に強く抗議し、 米軍基地の撤去を求めます。

わたしたちは日本聖公会に連なる者として、イエス・キリストの教えに従い、一人ひとりのいのちが尊ばれる社会の実現のために、心を合わせて祈り活動してきました。ことに、これまで沖縄の視点から平和の学びを進めつつ、沖縄の米軍基地をめぐる現状に多大な関心を寄せてきました。

さて、2012年10月16日午前3時35分頃、沖縄県中部市で、米海軍の上等水兵、同三等兵曹の2名が、帰宅途中の日本人女性に性的暴行を加え、集団強姦と致傷容疑で沖縄県警に逮捕されました。卑劣きわまりない性的暴力が、またしても現役米軍兵士によって引き起こされました。わたした

ちは、被害にあった女性の耐え難い恐怖と哀しみと深い傷を思い、激しい怒りをもって抗議します。

この事件に先立つ今年8月にも、那覇市内で米海兵隊員による強制わいせつ傷害事件が起こっており、沖縄県知事が県内27市町村の代表らとともに、藤村修官房長官、ルース駐日大使らに米軍人による事件の防止を申し入れたばかりです。事件のたびごとに綱紀肅正という虚しい「反省」が表明されます。しかし止むことなく事件は繰り返されています。私たちは、軍事基地の存在そのものが犯罪の元凶であるという本質を隠し続けようとする日米両政府に強く抗議するものです。軍隊は人を人とは見なさず、ためらいなく人を殺すことを目的とし、軍事基地はそれを日々訓練する暴力の装置です。軍事基地がある限り、市民の日常生活は脅かされ、中でも一番の犠牲となるのが、女性や子どもたちです。沖縄で繰り返される米軍犯罪の背後には、差別と人権侵害、植民地意識があります。女性と沖縄への差別やこれらの犯罪を、わたしたちは「人間の尊厳を踏みにじることは神の創造を傷つける罪である」と信じる立場から見逃すわけにはいきません。

10月1日には、沖縄県民がこぞって反対しているオスプレイの普天間基地配備が強行されました。地元自治体と県民の反対への強い意思を全く無視し、オスプレイ配備を強行したこと自体が沖縄への差別の現れです。この間相次ぐ米軍犯罪が、こうした沖縄県民の意思を顧みない政治と無関係であるはずはありません。世界一危険な普天間基地に、「安全」が全く証明されていないオスプレイを配備し、県民の意思を踏みにじり、オスプレイの爆音をまき散らそうとする、このような非人間的判断と米兵犯罪は無縁ではありません。

日本政府は、基地の存在に起因して引き起こされた事件の本質を問い直し、日米地位協定を見直し、沖縄で幾度も幾度も繰り返される米軍犯罪を、厳重に阻止することを求めます。わたしたちは、在日米軍基地の75%が沖縄に集中していることを忘れることなく、沖縄の女性たちの思いに連なるものとなることを願いながら、日米両政府に以下の事を要請します。

- 被害者への謝罪と補償が適切になされること
- 被害者の自己責任を意味するような言説を許さないことを日本政府は明言し、被害者とその家族を守るためにあらゆる手段を講じること
- 加害者を日本の司法により裁き処罰すること
- 日米軍事同盟による日米地位協定を見直し、沖縄米軍基地を縮小・撤退させること。特に、普天間基地をすみやかに返還し、オスプレイの配備を撤回すること。また、米軍犯罪をなくすように根本的な取り組みを実施すること。

2012年11月2日

日本聖公会 正義と平和委員会 委員長 主教 洪澤 一郎
日本聖公会 女性の課題に関する担当 木川田道子
吉谷かおる

日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言に関するお願い

2012年10月25日

首座主教 ナタナエル 植松 誠

主の平和がありますように。

2012年9月14日～17日、静岡県浜名湖畔の研修施設「カリアック」において、2012年日本聖公会宣教協議会が開かれました。この協議会は、2008年5月の日本聖公会第57(定期)総会で開催が決議されたもので、全教区から主教をはじめ教区代表、管区の諸委員会、また大韓聖公会からの代表など、聖職・信徒約140名が集いました。

基調講演、東日本大震災被災地からの発題、バイブル・シェアリングなどを全員で聴き、それに続いてグループ協議が何回にもわたって持たれました。この、日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言は、今回の宣教協議会で話し合われたことを、これからの日本聖公会のあゆみ十年間の指針となるべき提言としてまとめたものです。

1995年に開かれた日本聖公会宣教協議会では、戦後50年を迎える日本聖公会として、それまでの過去を振り返り、反省と悔い改めに立って、日本聖公会の戦争責任を告白し、その翌年の総会では、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議しました。しかし、この宣教協議会での協議の結果が、また「戦争責任に関する宣言」が、日本聖公会の隅々にまで伝えられ、皆でそれを共有できたかと言うと、決してそのようにはならなかったというのが真実であったと思います。その点、今回の宣教協議会は、日本聖公会の全教区からの参加者が、それぞれの立場から熱心な話し合いを重ね、その果実として生み出されたのが、この提言であると言えます。

聖公会が大切にしてきた教会の五つの要素、〈宣教、奉仕、証し、礼拝、交わり〉について、多岐にわたる提言がされています。今後10年間にわたって、私たちはこの提言に取り組んでまいります。管区として、教区として、教会として、また個人として、この提言のどの部分に取り組むべきかの検討が始められます。提言を、それぞれのコンテキストに合うように再解釈することも必要でしょう。先週行われた日本聖公会主教会でも、この提言に関して、主教会として率先して取り組むべき課題について、研究を開始いたしました。

この提言は総会決議ではありませんが、それと同じような重さを持ったものであると信じます。どうぞ、皆様の教区、教会、施設、学校、集会などで、この提言を読み、学び、話し合ってください、これからの宣教・牧会への方向が示されますようにと祈っております。

主の豊かなお導きと祝福がありますように。

在 主

2012年日本聖公会宣教協議会

「いのち、尊厳限りないもの」－宣教する共同体のありようをもとめて－

日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言

2012年9月14日（金）から17日（月）の日程で、浜名湖畔の研修施設「カリアック」に、すべての教区主教をはじめ各教区代表、管区諸委員会、そして大韓聖公会からの代表など信徒・教役者140余名が集い、「2012年日本聖公会宣教協議会」が開催されました。この宣教協議会は2008年の日本聖公会第57（定期）総会において、以下の3つの目的で開催されることが決議されていました。

- ① 聖公会信徒の減少・高齢化、聖職者の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫などの現状を受け止め、互いの知恵と経験を分かち合い、この喜びの福音を伝える具体的な宣教ビジョンを構築すること
- ② 長期にわたる経済不況のもとで、貧困・失業・家庭崩壊など様々な困難に直面し、殊に高齢者や障がい者など社会的に弱い立場におかれている人びとにとっては、ますます生きにくい社会になっています。このような社会において、教会に求められている宣教について再認識し、具体的な方策を検討する
- ③ 世界各地における政治・宗教・国家・民族などを巡る対立が続いており、未だ戦火が止むことはありません。1996年の第49（定期）総会決議を通して日本聖公会は、日本の戦争責任に関してアジア諸国に対して公式に謝罪しました。その決議を踏まえ、日本聖公会が永久に平和の器として用いられるため

しかし、2011年3月11日に起こった東日本大震災と福島第一原子力発電所の災害は、その地に生きるすべての＜いのち＞に対して重大な犠牲と被害をもたらしました。これらの災害をもたらしている様々な課題は、わたしたちのこれまでの生き方や教会のありようを根本的に問い続けています。もはやこの災害によってもたらされた事態・現実とは無関係に、わたしたちは宣教や教会の具体的な事柄を考えることができません。このような状況の中で今回の宣教協議会が開催され、わたしたちは教会の宣教課題や組織維持の課題を巡り、多くの時間を共有し、学び、語り合いました。

「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」というタイトルで話されたベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターからは、福島第一原子力発電所の災害による放射能汚染に関する深刻な問題提起を受け、キリスト者としてこの現実において、どのような生き方を選択するのかを問われました。東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」の長谷川清純司祭は、被災者に寄り添う主イエスとの出会いの中から教会の働きを語られました。また、同じく越山健蔵司祭は、放射能汚染地域に生きる人びとの現実と苦悩、そしてその中に置かれている教会と牧師の苦悩・躊躇を語られました。

西原廉太司祭による基調講演「わたしたちの『宣教』を想い描くために～日本聖公会の宣教の課題と可能性～」では、豊富な資料とともに多様な宣教ビジョンが提供されました。さらに笹森田鶴司祭によるバイブル・シェアリングは、「わたしたちは何者で、何をすべき存在であるのか～神との関わりの中で問いかけに答える～」というテーマで行われ、被造物としての人間の使命について互いに分

かち合いました。

これらの学びをもとに、わたしたちは15のグループに分かれ、これからの教会のビジョンについて語り合いました。わたしたちはここで話し合われた様々な内容をまとめ、日本聖公会がすべてのくいのち>を守る決意を持った共同体として新たにされるために、以下のような提言をいたします。

しかしながら、限られた時間と人数でのディスカッションによる提案であり、それゆえこれらの提言をもとに、各教区・教会においてさらに議論を深め、実践していかれることを願っています。

日本聖公会<宣教・牧会の十年>にむけて

今回の宣教協議会で、わたしたち日本聖公会の宣教の原点は、教会内の牧会はもちろん、教会のある地域全体に対する牧会的働きをていねいに実践していくこと、その地域にある課題、そしてこの世界にある課題に誠実に取り組むことにあると再確認しました。

悲劇に満たされたこの世界・社会において、絶望の内にある人びとのかすかな声に耳を傾け、声を出せない人びとの「声」となっていくこと。圧倒的に希望を奪われた状況の中に生きる人びとに対して、「にもかかわらず」、神の祝福「<いのち>の喜び」を語り続けること。それがたとえ、か細い声や小さな祈りであったとしても語り続けること。これらはわたしたちが、「いっしょに歩こう!プロジェクト」の働きから学んだことでもありました。

日本聖公会が新しい共同体となるために、わたしたちは過去の歩みを謙虚に省み、神への信頼と希望をもって歩みだします。キリストの救いと喜びをこの世に現すため、また sacrament をとおして与えられる神の恵みに多くの人びとを招くために、み言葉と礼拝への思いを深め、ともに祈ります。教会は、特に癒しと解放を求める人びとに心を通わせ、一人ひとりのくいのち>を宝とし、地域(パリッシュ)そしてすべての被造物とともに主の救いに与ることを願います。

わたしたちは、これからの十年間を『日本聖公会<宣教・牧会の十年>』と名づけ、日本聖公会のすべての信徒・聖職、教会・教区が心一つにして、それぞれの場、それぞれの形で、以下の諸項目を中心とする<宣教・牧会>に徹底して取り組むことを提言します。その動きを推進するための機関を管区と各教区に設置し、相互に協力しながら新たな共同体づくりをめざします。どのような機関がふさわしいのかについては、管区においては常議員会に、教区においてはそれぞれのしかるべき機関に付託し、新たに歩みだすことを願います。

十年後に「2022年日本聖公会宣教協議会」を開催し、十年の間どのように<宣教・牧会>に取り組むことができたのかを分かち合うことを合わせて提案します。それは同時に、わたしたちの<宣教・牧会>の果実を刈り取る収穫感謝の祭りとなることでしょう。

今回の宣教協議会で話し合われたことを、聖公会が大切にしてきた教会の5つの要素、宣教(ケリユグマ)、奉仕(ディアコニア)、証し(マルトウリア)、礼拝(レイトゥルギア)、交わり(コイノニア)に基づいて次のように提言します。【()内はギリシャ語です】

1 み言葉に聴き、伝えること<ケリユグマ>

- ◇ わたしたちは、すべてのくいのち>の創造者であり、すべてのくいのち>の尊厳を回復して下さる方であり、すべてのくいのち>の導き手である、主なる神のみ言葉にたえず聴き従います。
- ◇ 信徒と聖職がともに、“ていねいな<宣教・牧会>”を担っていくため、信徒奉事者・伝道師・担任聖職などを含め、より多様な働きを作り出していきます。そのために必要な養成・訓練プログラ

ムを整備します。

- ◇ 神学校での教育を教区や管区が積極的に捉え直し、日本聖公会として、聖職および神学教育指導者の養成に取り組むことを望みます。
- ◇ 東日本大震災被災地の現場における証言をとおして、「被災者に寄り添う主イエスとの出会い」の物語と聖書の物語を重ね合わせ、各々の地域（パリッシュ）で担うべき課題を明らかにします。

2 世界、社会の必要に応え仕えること<ディアコニア>

- ◇ わたしたちは、自然と共生することで、地球の<いのち>を守ります。
- ◇ 困難な状況に置かれた人びととともに歩む中で、<いのち>より他のものを優先する社会に「否」を言い、社会的矛盾を明らかにする勇気を持ちます。
- ◇ 1962年に立教大学原子力研究所の開所にあたって「原子炉奉獻の祈り」¹を唱えたことの問題性を認識し、「原発のない世界を求めて—原子力発電に対する日本聖公会の立場—」²で表明した内容を誠実に主張・追求・実践します。
- ◇ これからも東日本大震災の被災者に寄り添い、ともに歩み、祈り続けます。「いっしょに歩こう!プロジェクト」が、その「活動方針(ミッションステートメント)」を大切に、被災した人びとに敬意を払ってきたように、プロジェクトに区切りをつける2013年5月末以降も、被災地の人びととのつながりを尊重することを望みます。
- ◇ 教会の歩みの中で生まれてきた施設(保育園・幼稚園・学校・医療・福祉施設など)が宣教の働きであることを再認識し、地域社会においてそれらの施設と協働していきます。

3 生活の中で福音を具体的に証しすること<マルトウリア>

- ◇ わたしたちは、それぞれの地域における多様な教会の姿が、<福音><宣教>であることを確認します。
- ◇ これまでの教会のありよう(習慣や組織など)を尊重しつつ、現代に証しするために、それらを大胆に変えていく勇気を持ちます。
- ◇ 「どこで、誰と、どのように」を大切にして歩む教会のありかたを模索し、地域の必要に応じていきます。
- ◇ 誰にでもわかる言葉と方法で、信仰生活の魅力を伝えられるように努めます。

4 祈り、礼拝すること<レイトゥルギア>

- ◇ わたしたちは、すべての<いのち>の尊厳に基づいた多様な礼拝・諸式の研究に取り組みます。
- ◇ 様々な状況で生きる人びとの必要に対応するため、礼拝の時間や曜日の検討、式文のデータベース化、選択肢が豊かな式文の作成、多様な礼拝音楽の研究に取り組みます。
- ◇ 礼拝における信徒の役割をより豊かにするために、必要なプログラムを整備します。
- ◇ 共同の礼拝をより豊かにすると同時に、各自の祈りをとおして、一人ひとりが靈的に成長することに励みます。

1 アメリカ聖公会から研究用原子炉が寄贈された際の祈り/2001年稼働停止

2 2012年第59(定期)総会決議

5 主にある交わり、共同体となること<コイノニア>

- ◇ わたしたちは、すべての人の居場所・出会いの場となる教会の形成をめざします。
- ◇ 「高齢者」「青年」「女性」「男性」「子ども」「障がい者」「外国人」などとひとくりにせず、一人ひとりの生きている重みを尊重し、積極的な出会いの中から、いっしょに歩く交わりを形成していきます。
- ◇ 一人ひとりが宣教の担い手として、対等なパートナーシップのもとに協働していくため、ジェンダーの平等を保障し、いかなるハラスメントも起こさない共同体を築きます。
- ◇ 青年たちの声に耳を傾け、自主的な活動を尊重して支援します。
- ◇ この世に仕える教会の形成のためには、様々な立場の人びとが、教会・教区・管区の意志決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性の比率が高まるように働きかけ、2022年までに少なくとも30%の参画³を実現し、さらに青年層の参画も推進します。
- ◇ 「聖職任せ」「信徒任せ」ではなく、一人ひとりが教会内外とともに牧会をするという意識を持ち、共同体全体が積極的に宣教の業に参加していきます。
- ◇ 一つの教会だけではなく、教会・教区を超えて積極的な関わりを持ち、互いの賜物を分かち合います。そして互いの違いを乗り越え、具体的に出会う機会を作り、教区間協働や教区の再編を目指して具体的な活動を推進していきます。
- ◇ 世界の聖公会と情報を交換し、互いに学び合い、協力し合います。
- ◇ 大韓聖公会やフィリピン聖公会をはじめ、アジアの諸聖公会との協働をさらに推進します。そのためにも、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」⁴のさらなる実質化を図ります。

2012年9月17日

2012年日本聖公会宣教協議会参加者一同

3 2004年第49回国連女性の地位委員会に派遣された全聖公会中央協議会代表団による声明を受けた第13回全聖公会中央協議会の承認に基づく。

4 1996年第49(定期)総会決議

日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/> ☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。
comm-sec.po@nskk.org 広報主事(鈴木)宛て



ホームページ <http://nskk.org/walk/>